



| | |
|------------------|---|
| Title | 地域住民の外国人との交流・意識とその変化：群馬県大泉町を事例として：第4章 共生に関する展望と町に対する意識 |
| Author(s) | 濱田, 国佑 |
| Citation | 『調査と社会理論』・研究報告書, 22, 59-78 |
| Issue Date | 2006-03 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/22667 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 22_P59-78.pdf |



第4章 共生に関する展望と町に対する意識

これまで、大泉町に居住する、日本人住民と外国人住民の、交流のあり方とその意識について、明らかにしてきた。それでは、日本人住民たちは、今後大泉町がどのような方向に進めばよいと考えているのだろうか。また、「共生の町」という大泉町に対する外部からの評価について、どのように感じているのだろうか。本章では、日本人住民のアンケート調査、および聞き取り調査の結果をもとに、上記の事柄に対する日本人住民の意識を明らかにし、大泉町の将来展望について考察してみたい。

第1節 町に対する住民の意識

大泉町の日本人住民たちは、自らが居住する町について、どのような感覚、意識を持っているのだろうか。そして、外国人住民が来住する前と後で、町はどのように変わり、そして、今後どのような町になっていくべきだと考えているのだろうか。

①大泉町に対する印象

まず、日本人住民が、大泉という町について、どのような印象を持っているのかを明らかにすることにしたい。大泉町の印象について、いくつかのテーマを挙げ、それに対する賛否を聞いたところ、表4-1のような結果になった。

1999年の調査（表4-2）と比較してみると、2005年の調査では、「(大泉町は)新しく来た人でもなじみやすい」という点について、否定的な考え方を持つ人が増えている。また、「昔から住んでいる人の意見が強い」という点については、逆に肯定的な考えを持つ人が増えている。

表4-1 大泉町について感じていること

| | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったくそう 思わない | 合 計 |
|----------------------|--------------|--------------|---------------|----------------|---------------|
| 住民間のまとまりが強い | 47 9.1% | 246 47.7% | 197 38.2% | 26 5.0% | 516 100.0% |
| 新しく来た人でもなじみやすい | 22 4.3% | 288 56.1% | 170 33.1% | 33 6.4% | 513 100.0% |
| 昔からの文化・習慣を大切にす | 68 13.5% | 245 48.6% | 175 34.7% | 16 3.2% | 504 100.0% |
| 住民同士の接点がない | 28 5.5% | 149 29.5% | 290 57.4% | 38 7.5% | 505 100.0% |
| 昔から住んでいる人の意見が強い | 114 22.3% | 188 36.7% | 193 37.7% | 17 3.3% | 512 100.0% |
| 新しいものを積極的に取り入れる気風がある | 24 4.7% | 177 34.8% | 267 52.5% | 41 8.1% | 509 100.0% |

表4-2 大泉町について感じていること（1999年調査）

| | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったくそう 思わない | 合計 |
|-----------------|-------------|--------------|---------------|----------------|---------------|
| 住民間のまとまりが強い | 37 9.0% | 156 37.9% | 201 48.8% | 18 4.4% | 412 100.0% |
| 新しく来た人でもなじみやすい | 55 13.0% | 213 50.5% | 136 32.2% | 18 4.3% | 422 100.0% |
| 昔からの文化・習慣を大切にす | 57 13.8% | 161 39.1% | 170 41.3% | 24 5.8% | 412 100.0% |
| 新旧住民間の接点が見だしにくい | 29 7.1% | 122 30.0% | 219 53.9% | 36 8.9% | 406 100.0% |
| 昔から住んでいる人の意見が強い | 58 14.3% | 139 34.2% | 172 42.3% | 38 9.3% | 407 100.0% |

このように、1999年の調査と比較すると、大泉町は、新しく来た人にとってはなじみにくい、閉鎖的な町であるという印象を持つ人が相対的に増えている。では、こうした意識は、どのような層によって支持されているのだろうか。

大泉に転入してきた世代別に、その意識を見てみると、祖父母の代に大泉に転入して来た層が、大泉町に対して、もっとも肯定的なイメージを持っていることがわかった（表4-3、表4-4、表4-5参照）。例えば、祖父母の代に転入してきた人の約8割が、大泉は「新しく来た人でもなじみやすい」町かということを開いた質問に対して、「とてもそう思う」、あるいは「ある程度そう思う」という回答を選択しており、大泉町が新規来住者にとって、住みやすい町だと考えていることがわかる。一方、大泉に転入してきたのが、「親の代」または「自分の代」であった場合、大泉が「新しく来た人でもなじみやすい」町かという質問に対し、肯定的な回答をした人の割合は、いずれも50%台にとどまっており、祖父母の代に転入してきた層に比べてその割合は低くなっている。

表4-3 大泉町への転入時期×住民間のまとまりが強い

| | | 住民間のまとまりが強い | | | | 合計 |
|------|--------|-------------|--------------|---------------|--------------|---------------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 転入世代 | 自分の代 | 21 8.8% | 111 46.3% | 98 40.8% | 10 4.2% | 240 100.0% |
| | 親の代 | 3 3.2% | 43 46.2% | 35 37.6% | 12 12.9% | 93 100.0% |
| | 祖父母の代 | 10 17.2% | 30 51.7% | 18 31.0% | 0 .0% | 58 100.0% |
| | 祖父母より前 | 12 10.7% | 55 49.1% | 41 36.6% | 4 3.6% | 112 100.0% |
| | わからない | 1 10.0% | 4 40.0% | 5 50.0% | 0 .0% | 10 100.0% |
| 合計 | | 47 9.2% | 243 47.4% | 197 38.4% | 26 5.1% | 513 100.0% |

P=.011 (χ 二乗検定)

表4-4 大泉町への転入時期×新しく来た人でもなじみやすい

| | | 新しく来た人でもなじみやすい | | | | 合計 |
|------|------------|----------------|--------------|---------------|--------------|---------------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 転入世代 | 自分の代 | 7 2.9% | 129 53.8% | 87 36.3% | 17 7.1% | 240 100.0% |
| | 親の代 | 3 3.4% | 43 48.3% | 34 38.2% | 9 10.1% | 89 100.0% |
| | 祖父母の代 | 3 5.2% | 44 75.9% | 10 17.2% | 1 1.7% | 58 100.0% |
| | 祖父母より 前 | 8 7.1% | 65 58.0% | 35 31.3% | 4 3.6% | 112 100.0% |
| | わからない | 0 0.0% | 6 54.5% | 3 27.3% | 2 18.2% | 11 100.0% |
| | 合計 | 21 4.1% | 287 56.3% | 169 33.1% | 33 6.5% | 510 100.0% |

P=.026 (χ²二乗検定)

表4-5 大泉町への転入時期×昔からの文化習慣を大切にする

| | | 文化習慣を大切にする | | | | 合計 |
|------|------------|-------------|--------------|---------------|--------------|---------------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 転入世代 | 自分の代 | 27 11.4% | 112 47.5% | 91 38.6% | 6 2.5% | 236 100.0% |
| | 親の代 | 6 6.7% | 38 42.7% | 39 43.8% | 6 6.7% | 89 100.0% |
| | 祖父母の代 | 10 17.5% | 32 56.1% | 14 24.6% | 1 1.8% | 57 100.0% |
| | 祖父母より 前 | 22 20.0% | 58 52.7% | 27 24.5% | 3 2.7% | 110 100.0% |
| | わからない | 2 22.2% | 4 44.4% | 3 33.3% | 0 .0% | 9 100.0% |
| | 合計 | 67 13.4% | 244 48.7% | 174 34.7% | 16 3.2% | 501 100.0% |

P=.029 (χ²二乗検定)

ただ、転入時期が古い人ほど、大泉が新しく来た人にとってなじみやすい町だと考えているとは、必ずしも言えない。祖父母より前の世代に転入してきた層で、大泉町は「新しく来た人でもなじみやすい」という考え方に対して肯定的な回答をした人は、65.1%にとどまっているからである。この割合は、「自分の代」、および「親の代」に転入してきた層よりも高くはなっているが、「祖父母の代」に転入してきた層よりは低い。

大泉に住んで16代目になるというNo. 45は、両親が早く亡くなったため、いろいろなしきたり

の面で苦勞したと述べ、その経験から、新しく来る人には、なるべく暖かく接するよう心がけるようになったと述べている。このように、祖父母以前から居住する世代は、地域の風習やしきたりを熟知しているが故に、逆に、新しく来た人にとってはそれほど優しくない町だという判断を持つ人がある程度存在しているのではないかと思われる。

No. 45

「わたしの…、わたしの家も、両親が早く亡くなっちゃったから。女房と二人で、こう、いろいろ…生活してきたわけですけど。」

「うーん、若さのせいもあった、経験不足もあったんですけど、そういう、ちょっと、同じ…わたしたちの、こう、田舎っていうのはね、ちょっと、昔のしきたりをそのまま受け継いでるじゃないですか。だから、そういう意味で、わたしたちも、その田舎的な閉鎖っていうのは、こう、身をもって経験してきたから。」

「うん。だから、そういう、若い…、ここに住まいを求めてきた人とかね、なるべく、こう、優しくね。まあ、いろいろ、ほら、経験不足は、そりゃ、若けりゃしょうがないんだけど。うん。そういう人たちを暖かく迎えようっていう、話はしましたよね。」

それでは、大泉の町民たちは、外国人の数が急増したことで、町はどのように変化したと考えているのだろうか。表4-6は、外国人の増加によるさまざまな町の変化について、その賛否を尋ねた結果をまとめたものである。

表4-6 大泉町の変化に対する意識

| | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わない | 合 計 |
|-------------------|-------------|--------------|---------------|----------------|-------|
| 外国人との交流が進んだ | 33 | 200 | 208 | 73 | 514 |
| | 6.4 | 38.9 | 40.5 | 14.2 | 100.0 |
| 外国の文化に触れられるようになった | 21 | 159 | 233 | 95 | 508 |
| | 4.1 | 31.3 | 45.9 | 18.7 | 100.0 |
| 町がにぎやかになった | 57 | 205 | 184 | 59 | 505 |
| | 11.3 | 40.6 | 36.4 | 11.7 | 100.0 |
| 町の知名度が上がった | 143 | 223 | 91 | 46 | 503 |
| | 28.4 | 44.3 | 18.1 | 9.1 | 100.0 |
| 町のイメージが良くなった | 8 | 49 | 282 | 163 | 502 |
| | 1.6 | 9.8 | 56.2 | 32.5 | 100.0 |
| 治安が悪くなった | 197 | 208 | 90 | 21 | 516 |
| | 38.2 | 40.3 | 17.4 | 4.1 | 100.0 |
| ゴミ捨てなど生活のルールが乱れた | 207 | 161 | 117 | 29 | 514 |
| | 40.3 | 31.3 | 22.8 | 5.6 | 100.0 |
| 生活環境が悪くなった | 116 | 178 | 190 | 27 | 511 |
| | 22.7 | 34.8 | 37.2 | 5.3 | 100.0 |
| 日本人の仕事が減った | 53 | 126 | 260 | 69 | 508 |
| | 10.4 | 24.8 | 51.2 | 13.6 | 100.0 |

これを見ると、外国人の増加による否定的な影響を聞いた質問において、「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」と答える割合が高くなっていることがわかる。

特に、治安が悪くなったと考える人が多く、「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」と答えた人の割合は、あわせて78.5%にのぼっている。また、「ゴミ捨てなど生活のルールが乱れた」と考える人も多く、この質問に対して、「とてもそう思う」と答えた人の割合は、4割を超えている。

一方、外国人の数が増えたことによる肯定的な効果があると考え人は、それほど多くはない。「外国人との交流が進んだ」という項目について、「とてもそう思う」と答えた人の割合は、6.4%しか存在しない。また、「ある程度そう思う」という評価をあわせた割合も45.3%にとどまっておらず、否定的評価を持つ人の方が多いという結果になっている。

ただ、「町の知名度が上がった」という項目については、「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」という肯定的な評価をする人が72.7%と、過半数を大きく上回っており、外国人が増えたことにより、町が良く知られるようになったという印象を持っている人は確かに多いように思われる。しかしながら、こうした「知名度」の上昇は、決して良いイメージのものとしては捉えられていない。「町のイメージが良くなった」という項目について、「とてもそう思う」と答えた人の割合は、わずかに1.6%であり、「ある程度そう思う」と答えた人の割合も、9.8%にとどまっているからである。

では、こうした外国人の増加による町の変化についての意識は、住民各層によって、どのように異なっているのだろうか。

意識の差が顕著に見られるものとしては、まず、年齢層によるものが挙げられる。年齢層が高いほど、外国人の増加によるネガティブな影響をより強く感じているという傾向が存在するのである。例えば、「生活環境が悪化した」という質問に対して、「とてもそう思う」、あるいは「ある程度そう思う」という回答をした人の割合は、年齢が60歳以上の場合、合わせて65.2%に達しているのに対して、年齢が20～30代の場合には、その割合は49.6%にとどまっている（表4-7）。同様に、「ゴミ捨てなど生活のルールが乱れた」、あるいは「日本人の仕事が減った」という質問でも、年齢層があがるほど、こうしたネガティブな影響があると考え人は増えている（表4-8、表4-9）。

表4-7 年齢世代×環境が悪化した

| | | 生活環境が悪化した | | | | 合計 |
|----------|--------|-------------|--------------|---------------|--------------|--------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 年齢 世代 | 20・30代 | 26 | 40 | 62 | 5 | 133 |
| | | 19.5% | 30.1% | 46.6% | 3.8% | 100.0% |
| | 40・50代 | 45 | 78 | 86 | 8 | 217 |
| | | 20.7% | 35.9% | 39.6% | 3.7% | 100.0% |
| | 60代以上 | 42 | 59 | 41 | 13 | 155 |
| | | 27.1% | 38.1% | 26.5% | 8.4% | 100.0% |
| 合計 | | 113 | 177 | 189 | 26 | 505 |
| | | 22.4% | 35.0% | 37.4% | 5.1% | 100.0% |

P=.011 (χ²二乗検定)

表4-8 年齢世代×環境が悪化した

| | | 生活のルールが乱れた | | | | 合計 |
|------|--------|-------------|--------------|---------------|--------------|--------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 年齢世代 | 20・30代 | 45 | 39 | 41 | 8 | 133 |
| | | 33.8% | 29.3% | 30.8% | 6.0% | 100.0% |
| | 40・50代 | 84 | 77 | 49 | 8 | 218 |
| | | 38.5% | 35.3% | 22.5% | 3.7% | 100.0% |
| | 60代以上 | 75 | 43 | 26 | 13 | 157 |
| | | 47.8% | 27.4% | 16.6% | 8.3% | 100.0% |
| 合計 | | 204 | 159 | 116 | 29 | 508 |
| | | 40.2% | 31.3% | 22.8% | 5.7% | 100.0% |

P=.016 (χ^2 二乗検定)

表4-9 年齢世代×日本人の仕事が減った

| | | 日本人の仕事が減った | | | | 合計 |
|------|--------|-------------|--------------|---------------|--------------|--------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 年齢世代 | 20・30代 | 12 | 23 | 74 | 23 | 132 |
| | | 9.1% | 17.4% | 56.1% | 17.4% | 100.0% |
| | 40・50代 | 21 | 49 | 118 | 28 | 216 |
| | | 9.7% | 22.7% | 54.6% | 13.0% | 100.0% |
| | 60代以上 | 20 | 51 | 66 | 17 | 154 |
| | | 13.0% | 33.1% | 42.9% | 11.0% | 100.0% |
| 合計 | | 53 | 123 | 258 | 68 | 502 |
| | | 10.6% | 24.5% | 51.4% | 13.5% | 100.0% |

P=.026 (χ^2 二乗検定)

一方、「外国の文化に触れられるようになった」という、外国人の増加によるポジティブな影響についての質問では、年齢層があがるほど、「あまりそう思わない」、あるいは「全くそう思わない」という回答を選択する人が多くなっている（表4-10）。特に「全くそう思わない」と答えた人の割合は、年齢が60歳以上の場合には、23.8%となっており、20～30歳代の場合の2倍以上とかなりの差が生じている。

表4-10 年齢世代×外国の文化に触れられるようになった

| | | 外国の文化に触れられるようになった | | | | 合計 |
|------|--------|-------------------|--------------|---------------|--------------|--------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 年齢世代 | 20・30代 | 9 | 52 | 57 | 15 | 133 |
| | | 6.8% | 39.1% | 42.9% | 11.3% | 100.0% |
| | 40・50代 | 7 | 64 | 104 | 43 | 218 |
| | | 3.2% | 29.4% | 47.7% | 19.7% | 100.0% |
| | 60代以上 | 5 | 39 | 71 | 36 | 151 |
| | | 3.3% | 25.8% | 47.0% | 23.8% | 100.0% |
| 合計 | | 21 | 155 | 232 | 94 | 502 |
| | | 4.2% | 30.9% | 46.2% | 18.7% | 100.0% |

P=.032 (χ 二乗検定)

また、調査対象者が生まれた場所によっても、大泉町の変化に対する意識には、ある程度の差異が見られる。例えば、生まれた場所が大泉町であった場合、外国人の増加によって「治安が悪くなった」という質問に対して、「とてもそう思う」と答える割合は高くなっており（42.6%）、関東以外の出身者の場合（31.4%）と比べると10%以上の差となっている（表4-11）。同様に、外国人の増加によって「日本人の仕事が減った」という意識も、大泉町の出身者は、他の地域の出身者に比べて、強く持っていることがわかる（表4-12）。

表4-11 生まれた場所×治安が悪くなった

| | | 治安が悪くなった | | | | 合計 |
|--------|------------|-------------|--------------|---------------|--------------|--------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 生まれた場所 | 大泉町 | 78 | 72 | 24 | 9 | 183 |
| | | 42.6% | 39.3% | 13.1% | 4.9% | 100.0% |
| | その他 群馬県 | 47 | 53 | 15 | 5 | 120 |
| | | 39.2% | 44.2% | 12.5% | 4.2% | 100.0% |
| | その他関東 | 35 | 40 | 25 | 3 | 103 |
| | | 34.0% | 38.8% | 24.3% | 2.9% | 100.0% |
| | その他国内 | 32 | 42 | 26 | 2 | 102 |
| | | 31.4% | 41.2% | 25.5% | 2.0% | 100.0% |
| | 外国 | 5 | 1 | 0 | 1 | 7 |
| | | 71.4% | 14.3% | 0.0% | 14.3% | 100.0% |
| 合計 | | 197 | 208 | 90 | 20 | 515 |
| | | 38.3% | 40.4% | 17.5% | 3.9% | 100.0% |

P=.043 (χ 二乗検定)

表4-12 生まれた場所×日本人の仕事が減った

| | | 日本人の仕事が減った | | | | 合計 |
|--------|------------|-------------|--------------|---------------|--------------|--------|
| | | とても そう思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | 全くそう 思わない | |
| 生まれた場所 | 大泉町 | 26 | 56 | 77 | 23 | 182 |
| | | 14.3% | 30.8% | 42.3% | 12.6% | 100.0% |
| | その他 群馬県 | 14 | 24 | 59 | 16 | 113 |
| | | 12.4% | 21.2% | 52.2% | 14.2% | 100.0% |
| | その他関東 | 8 | 21 | 60 | 15 | 104 |
| | | 7.7% | 20.2% | 57.7% | 14.4% | 100.0% |
| | その他国内 | 4 | 25 | 62 | 11 | 102 |
| | | 3.9% | 24.5% | 60.8% | 10.8% | 100.0% |
| | 外国 | 1 | 0 | 2 | 3 | 6 |
| | | 16.7% | 0.0% | 33.3% | 50.0% | 100.0% |
| 合計 | | 53 | 126 | 260 | 68 | 507 |
| | | 10.5% | 24.9% | 51.3% | 13.4% | 100.0% |

P=.010 (χ^2 二乗検定)

このようにアンケートの結果を見ると、大泉町の町民は、やはり、外国人の増加に対して否定的な意識を持っている人が多い。この傾向は、1999年の調査結果と比較しても、より強まっていると言える。ただ、調査対象者の年齢層、出身地によって、その傾向にはある程度の差異が見られることも事実である。年齢層が高く、昔から大泉を知っている人たちは、外国人の急増とそれに伴う大泉町の急激な変化に対して、否定的な印象をより強く持っていると言える。

また、1999年の調査と比べ、大泉町は「新しく来た人にとってなじみにくい」という印象を持つ人が増加していることにも注目しておくべきであろう。地域社会における交流自体が少なくなる中、日本人であれ、外国人であれ、新しく来た人に対して、古くから住んでいる人は否定的な印象を持ち、逆に、新しく来た人は古くから住んでいる人に対して、閉鎖的だという印象を持ってしまうような傾向があるということは否定できない。こうした意識が、外国人住民に対する否定的な意識として現れているとするならば、その根本的な原因は、地域社会のあり方自体に存在するとも言える。

②町への要望

大泉町の町民たちは、上記のように、外国人の増加に対しては、全般的に否定的な意識をもっていることがわかった。では、町に対しては、具体的にどのような要望を持っているのだろうか。

まず、外国人の受け入れに関しては、全体の約半数（47.4%）が、受け入れを減らすべきだと考えていることがわかる。この割合は、1999年の調査と比べて約10%増加しており、外国人の受け入れをもっと減らすべきだと考える人が、かなり増加していると言える。

こうした外国人の受け入れに対する意識においても、調査対象者の年齢によって、その傾向はやはり異なっている。年齢が20・30代である場合、外国人を「もっと減らすべき」だと答えたのは、約3割（30.5%）にとどまる一方、「どちらでもよい」とする回答が4割を超えており（41.2%）、多数を占めるという結果になっている。それに対して、年齢が60代以上の場合、外国人を「もっと

減らすべき」だと答えた人は過半数を上回っている（表4-13）。

表4-11 外国人の受け入れについて（年齢世代別、複数回答）

| | | もっと増やすべき | 現在のままでよい | もっと減らすべき | どちらでもよい | ケース数 |
|------|--------|----------|----------|----------|---------|--------|
| 年齢世代 | 20・30代 | 2 | 37 | 40 | 54 | 131 |
| | | 1.5% | 28.2% | 30.5% | 41.2% | 100.0% |
| | 40・50代 | 2 | 57 | 109 | 51 | 217 |
| | | 0.9% | 26.3% | 50.2% | 23.5% | 100.0% |
| | 60代以上 | 3 | 39 | 95 | 41 | 175 |
| | | 1.7% | 22.3% | 54.3% | 23.4% | 100.0% |
| 全体 | 7 | 133 | 244 | 146 | 523 | |
| | 1.3% | 25.4% | 46.7% | 27.9% | 100.0% | |

同様に、居住する行政区の外国人世帯比率によっても、その意識はある程度異なっている。居住する行政区の外国人世帯比率が20%を超える場合、外国人を「もっと減らすべき」だと答えた人の割合は、50%を超える一方、「現在のままでよい」と答えた人は19.6%しか存在しない。これに対して、外国人世帯比率が10%未満の場合、「もっと減らすべき」と答える人は依然として多いものの、「現在のままでよい」と答えた人も約3割（30.3%）存在しており、異なった傾向を示している（表4-12）。

表4-12 外国人の受け入れについて（外国人世帯比率別、複数回答）

| | | もっと増やすべき | 現在のままでよい | もっと減らすべき | どちらでもよい | ケース数 |
|---------|--------|----------|----------|----------|---------|--------|
| 外国人世帯比率 | 10%未満 | 5 | 44 | 67 | 35 | 145 |
| | | 1.4% | 30.3% | 46.2% | 24.4% | 100.0% |
| | 10～20% | 3 | 66 | 122 | 70 | 259 |
| | | 1.2% | 25.5% | 47.1% | 27.0% | 100.0% |
| | 20%以上 | 2 | 19 | 50 | 28 | 97 |
| | | 2.1% | 19.6% | 51.5% | 28.9% | 100.0% |
| 全体 | 7 | 129 | 239 | 133 | 501 | |
| | 1.4% | 25.7% | 47.7% | 26.5% | 100.0% | |

では、大泉町の町民は、外国人、および外国人問題に対する具体的な施策としては、どのようなことを望んでいるのだろうか。

外国人に対する政策として、もっとも要望が多かったのが、外国人に対して「地域社会のルールを徹底させる」というものであり、7割を超える人がこの回答を選択している。また、次いで多かったのが、「日本語・日本文化を学ぶ機会の充実」というもので、こちらも約半数（47.3%）の人が選択をしている。こうした結果を見ると、やはり、外国人に対して、日本語や日本社会のルールをきちんと学んで欲しいという意識が強いといえる（表4-13）。

表4-13 外国人に対する施策について（複数回答）

| | 度数 | 構成比 |
|------------------|-----|--------|
| 学校教育の充実 | 175 | 33.3% |
| 日本語・日本文化を学ぶ機会の充実 | 249 | 47.3% |
| 福祉・医療サービスの充実 | 30 | 5.7% |
| 参政権の付与 | 73 | 13.9% |
| 地域社会のルールを徹底させる | 379 | 72.1% |
| 特定の地域に住まわせる | 18 | 3.4% |
| 外国人の為の施策は必要ない | 30 | 5.7% |
| 外国人に対する施策は減らすべき | 19 | 3.6% |
| 行政への要望は特にない | 22 | 4.2% |
| ケース数 | 526 | 100.0% |

表4-14 外国人に対する施策について（1999年調査、複数回答）

| | 実数 | 構成比 |
|-----------------|-----|--------|
| 学校教育の充実 | 116 | 24.9% |
| 母国語教育の充実 | 52 | 11.2% |
| 福祉・医療サービスの充実 | 86 | 18.5% |
| 参政権の付与 | 27 | 5.8% |
| 地域社会のルールを徹底させる | 328 | 70.5% |
| 特定の地域に住まわせる | 14 | 3.0% |
| 外国人の為の施策は必要ない | 26 | 5.6% |
| 外国人に対する施策は減らすべき | 24 | 5.2% |
| 行政への要望は特にない | 52 | 11.2% |
| ケース数 | 466 | 100.0% |

1999年に実施した調査（表4-14）と比べると、「行政に対する要望は特にない」と答えた人の割合が、11.2%から4.2%にまで減少している。これは、裏を返せば、外国人問題に関する何らかの対策を求める声が増えているのだとも言える。具体的には、「福祉・医療サービスの充実」といった外国人に対する直接的な支援に関する要望が減る一方、「学校教育の充実」を求める声が多くなっている。

一方、日本人住民に対する施策に関する要望を見ると、「外国人に関する情報の提供」を挙げる割合が最も高く、全体の約6割（63.0%）が選択をしている（表4-15）。1999年の調査（表4-16）と比べると、こちらも、「行政に対する要望は特にない」という回答が減少する一方、「外国人に関する情報の提供」、「子どもへの国際理解教育の充実」といった要望が、それぞれ前回調査よりも増加しており、こうした問題に対する要望が高まっていることがうかがえる。

表4-15 住民に対する施策について（複数回答）

| | 実数 | 構成比 |
|----------------|-----|--------|
| 外国人との交流の機会を増やす | 88 | 17.5% |
| 子どもへの国際理解教育の充実 | 157 | 31.2% |
| 外国人に関する情報の提供 | 317 | 63.0% |
| 行政に対する要望は特にない | 58 | 11.5% |
| ケース数 | 503 | 100.0% |

表4-16 住民に対する施策について（1999年調査、複数回答）

| | 実数 | 構成比 |
|----------------|-----|--------|
| 外国人との交流の機会を増やす | 90 | 19.4% |
| 子どもへの国際理解教育の充実 | 76 | 16.3% |
| 町民への国際理解教育の充実 | 96 | 20.6% |
| 外国人に関する情報の提供 | 267 | 57.4% |
| 行政に対する要望は特はない | 79 | 17.0% |
| ケース数 | 465 | 100.0% |

大泉町の住民は、町に対して、上記のような意識を持っている。では、住民たちは、今後も大泉町に住みたいと考えているのだろうか。「今後とも大泉町に住みたいか」という質問に対して、「今の場所にずっと住む」と答えたのは、全体の60.6%であり、1999年調査よりもわずかながら増加している。また、「別の場所に移りたい」という回答を選択したのは13.3%であり、こちらもわずかながら、前回調査より減少している。

こうした結果を見ると、大泉町から移りたいと考えている人は、それほど増えてはいない。上記の設問に対する回答理由を聞いてみたところ、「ここに土地や家があるから」という理由が最も多く、66.0%の人が、この理由を選択している（表4-17）。このように、多くの人たちは、大泉町で既に土地や家を保有しており、将来にわたって大泉町で生活するということを決めている。

表4-17 大泉町に住む理由／移りたい理由（複数回答）

| | 度数 | 構成比 |
|----------------|-----|--------|
| 環境が良いから | 144 | 29.7% |
| 人間関係が良いから | 100 | 20.6% |
| 親の面倒を見るため | 79 | 16.3% |
| 土地・家があるから | 320 | 66.0% |
| 他に移る場所がない | 35 | 7.2% |
| 環境が悪いから | 47 | 9.7% |
| 人間関係が悪いから | 11 | 2.3% |
| 他の場所に土地・家があるから | 22 | 4.5% |
| 転勤があるから | 16 | 3.3% |
| 就職をするから | 6 | 1.2% |
| よい仕事がないから | 17 | 3.5% |
| 交通の便が悪いから | 42 | 8.7% |
| 結婚をするから | 7 | 1.4% |
| 総回答数 | 846 | 174.4% |
| ケース数 | 485 | 100.0% |

表4-18 大泉町に住む理由／移りたい理由（1999年調査、複数回答）

| | 度数 | 構成比 |
|----------------|-----|--------|
| 環境が良いから | 138 | 29.7% |
| 人間関係が良いから | 72 | 15.5% |
| 親の面倒を見るため | 69 | 14.8% |
| 土地・家があるから | 254 | 54.6% |
| 他に移る場所がない | 21 | 4.5% |
| 環境が悪いから | 40 | 8.6% |
| 人間関係が悪いから | 13 | 2.8% |
| 他の場所に土地・家があるから | 27 | 5.8% |
| 転勤があるから | 15 | 3.2% |
| 転職をするから | 5 | 1.1% |
| よい仕事がないから | 11 | 2.4% |
| 交通の便が悪いから | 45 | 9.7% |
| 結婚をするから | 9 | 1.9% |
| ケース数 | 465 | 100.0% |

もちろん、こうした意識は、年齢層が上がるほど強くなっている。年齢が20～30代の場合、「今の場所にずっと住む」と答えた人の割合は、36.8%にとどまっているのに対して、60代以上の場合、81.3%の人が、大泉町にずっと住む意思があると答えている（表4-19）。このような強い定住意思、定住予想があるからこそ、外国人が増加した大泉町の現状に対して、不満を持ち、それに良い印象を持たない場合も多いのである。

このように、大泉町の住民たちは、外国人の増加によって、治安や生活環境が悪化したと考えており、在住する外国人の数をもっと減らすべきだと考えていることがわかる。そして、その考えは、特に年齢が高い層によって支持されていた。

こうした意識には、かつての古き良き大泉町を取り戻したいという意向が少なからず反映されているように思われる。第3章の結末での引用にもあるように、大泉町の町民の中には、昔の「静かな」大泉町を知り、また、それに愛着を持っているからこそ、現状の変化は、受け入れがたいという気持ちを持っている人が少なからず存在しているのではないだろうか。日本人住民の中にも、こうした大泉町における保守的な空気を感じ取っている人が存在する。1999年の調査と比べると、「昔から住んでいる人の意見が強い」と考える人が増え、逆に、「新しく来た人でもなじみやすい」と考える人が減っている。

ただ、外国人の増加に伴う問題は、既に、もはや単純な外国人受け入れ数の削減、外国人の日本への同化という、レベルで解決できるものではなくなっているように思われる。つまり、元に戻すという選択は、事実上不可能な状況になっているのである。

大泉町は、ここ10数年の間に、その様相を確実に変化させてきている。そしてそれは、否定的な印象を伴って、語られることが多かったと言える。ただし、こうした大泉町におけるさまざまな変化を、否定的なものとしてではなく、肯定的なものとして、提示する努力が町にも必要なのではないかと、述べる者もいる。

「だから、もう、居残るんであれば、そういう、さっき言ったように、方針がきちんとしているのであればね、それは町民として、協力もしなければなんないし、わたし個人的には、大事にしてあげたいと思ってるから、個人はそういうことでもいいと思いますよね。えー、大事に出来るような、まあ、仕組みを徐々につくっていけば、大事にしてあげられると思います。で、町は、やっぱり、決心をしてもらわないといけないですね。」

「だから、プラスになるように、真剣に考えてもらう時期ですよ。」

「そういう、何か、この町を共生しながら、日本の国で珍しい地域にするんだっていう、強い決心が見えないですけどね、私たちから見てもね。だから、町がそうしたいんなら、そういう風に方針を出せばいいんで、それに本当に、根っから反対の人も出てくるだろうし、じゃあ、やってみようという人も多いただろうし。」

それでは、大泉町の町民たちは、将来のあるべき「共生」社会について、どのように考えているのだろうか。次節では、面接調査の対象者の語りから、それぞれが考える「共生」社会のあり方を描き出し、大泉町が将来取りうる「道」について、考察することにする。

表4-19 年齢世代×今後とも大泉町に住みたいか

| | | 今後とも大泉町に住みたいか | | | | 合計 |
|----------|--------|----------------|---------------|------------------|-------|--------|
| | | 今の場所に ずっと住む | 別の場所に 移りたい | 別の場所に 移る予定がある | わからない | |
| 年齢 世代 | 20・30代 | 49 | 26 | 21 | 37 | 133 |
| | | 36.8% | 19.5% | 15.8% | 27.8% | 100.0% |
| | 40・50代 | 131 | 26 | 8 | 54 | 219 |
| | | 59.8% | 11.9% | 3.7% | 24.7% | 100.0% |
| | 60代以上 | 143 | 20 | 0 | 13 | 176 |
| | | 81.3% | 11.4% | .0% | 7.4% | 100.0% |
| 合計 | | 323 | 72 | 29 | 104 | 528 |
| | | 61.2% | 13.6% | 5.5% | 19.7% | 100.0% |

P<.001

第2節 「共生」に対する意識

これまで、大泉町の日本人住民を対象にして、日本人住民と外国人住民との交流のあり方、外国人に対する意識、さらには、町に対する意識を明らかにしてきた。大泉町の町民たちは、外国人住民との関係を含めた大泉町自体のあり方を、総体としてどのように捉えているのだろうか。

おそらく、その評価は十人十色であり、今後の方向性についても一致した見解にはならないだろう。そこで、本節では、「共生」という言葉を手がかりにして、大泉町の町民が、町の将来、および外国人との関係について、どのように考えているかを探ってみることにしたい。

なお、「共生」という言葉は、人文・社会科学の分野では、現在非常に多義的に使用されており、明確な定義は存在しない。また、価値規範的・理念的な用語でもある。このような点をふまえた上で、大泉町の「共生」のあり方を浮かび上がらせることにする。

まず、現状において、「共生」は実現しているかという問いに対しては、ほとんどの人が実現していないと答えている。先に述べたように、「共生」という言葉は、理念的なものとして捉えられることが多いため、現状に対して、何か問題や不満を感じていれば、「共生」は実現されていないということになってしまう。そのため、このような結果となるのもある意味で当然だと言える。

逆に、実現していると答えたのは、聞き取り調査を行った対象者の中で、2名のみであった（表4-20）。No. 45の事例では、外国人との交流はないながらも、互いに、それぞれ生活を送っていくという状況が、「共生」であると捉えられている。また、本人自身も、1割を超える外国人が居住する状況の中、そうした環境に自然に順応したと述べている。同様に、No. 404も、日本人とブラジル人が、一緒に、問題なく暮らしている現状を、「共生」が実現している状態だと考えている。このように、両名とも、日本人とブラジル人との接点がない、住み分けの状態を「共生」だと認識しているが、そのことの是非については、「それがいいかどうかというのは、私にはわからない」と、価値判断を避けている。

No. 45

「大泉町というのは、外国人との共生ということを出しているんですけども、そうした共生というものは、実現しているとお感じになりますでしょうか？」

「そうですね。もう、1割、1割ちょっとの外国人がいるという、まあね、うちの近所にもいっぱいいるし。ただ、そういう、接点はないですけど。まあ、そういう、自然に順応しちゃったっていうか、はい。だから、これからも、そういう、まあ、お付き合いはないけども、同じ地区内で生活していくっていう…。」

No. 404

「まあ、一緒に問題なくいるんだから、共生してるんでしょうね。そういう意味ではね。これは、自慢できるか、私にはわかんないけれども。まあ、特に大きな問題がなく、ちいちゃい問題はたくさんあるんでしょうけれども、特になくやってるわけですから、やれ役場も、みんな、警察も、一所懸命協力してるでしょ。それがいいかどうかというのは、私にはわからない。」

では、他の人々は、現状について、どういう点で共生が実現していないと考えているのだろうか。そして、将来、どのような状態になれば、共生が実現すると考えているのだろうか。

多くの場合、単純に、日本人住民とブラジル人住民との間の交流が少ないという点で、「共生」

が実現していないという判断を下している。例えば、No. 361は、ボウリング大会など、日本人とブラジル人との間の交流の場は存在するとしながらも、そうした交流の機会は、多くの人に利用されているわけではなく、限定されたものにとどまっていると語っている。また、自身としても、そうした交流活動には参加しておらず、共生は実現していないと考えている。

No. 361

「私は実現していないと思っています。掛け声だけはあると思うんですけども、あの一実際…まあ私がそういう場についてないっていうのがあるかもしれないんですけども、交流の、例えばボウリング大会とかやっているんですよ、実際。ですから、そういう町としてはやっているんですよ。ただ、そういうところではあるかもしれないですけど、やっぱり地域としてはないと思いますね。」

こうした、共生の条件としての、「交流」の捉え方も、人によって異なっている。例えば、No. 127は、現在のような住み分けの状態では、「共生」は実現しないと考えている。現状は、日本人とブラジル人のコミュニティがそれぞれ単独で成立しているだけであり、「共生」とは、互いに影響を与えあって初めて成立するものではないかと述べている。このように、共生が成立するためには、イベントなどの「交流」にとどまらず、互いのコミュニティのあり方にも影響を与え合うような、より深いレベルの「交流」が必要だと考えているのである。

No. 127

「この大泉町なんですけども、一般的に、共生が実現しているとかって言われていまして…、どんな風にそれを感じます？それとも、あまり共生はしていないんじゃないかっていう感じ…。」

「うーん、そうですね、共生…までは、行ってないんじゃないかと思いますよね。」

「例えば、どんな点でっていうのは、ありますか？」

「コミュニティ…、日本人とブラジリアンのコミュニティが、交流してるっていうのは、あんまり意識…見えないですから。ただ、その間において、トラブルが起きてないんで、同じ地域住んでも、両立しているっていう…。共生っていうのは、お互いに、ある程度影響しあって、成り立ってる…感じじゃないですか。」

「相乗効果っていうか…。」

「うん。だから、単独で二本立ち上がってるっていう感じで…。」

「住み分け、みたいな感じなんじゃないかな。」

「うん。」

上記のように、互いの交流が、「共生」の実現のために必要だと考える人が多数を占める中、交流を実現するための基盤がそもそも存在しないと訴える人もいる。No. 442は、現在、ブラジル人が置かれているような労働環境では、「共生」は、実現しないと考えている。なぜなら、ブラジル人たちが、日本に来る目的は、あくまでも労働のためであり、個人対個人の交流が成立する基盤が存在していないからである。No. 442は、彼らが、大泉の町民と同じような職に就くようになって、初めて「共生」が成立するのではないかと述べている。

No. 442

(大泉町が「共生」の町と言われることに関してどう思うか?) 共生にはなっていないだろうね。当たり前のように職場にブラジルの人もいっぱいいる状況、例えば大泉役場の300人中1割2割がブラジル人だ

とか、保育士にもブラジル人がいるとかでもまったくないし、本当にブラジル人の人はいっぱいいるんだけど、働いている場所はどこか一箇所だとか、どこかの下請けとかね。また私もそういう仕事してないからよけいわからないしね。そういう仕事してる人はもっと触れ合ってるのかもしれないけどね。町を動かしていくような教育の現場とか行政の場とか、そういうところにブラジル人がいるわけではないから。そういうところで当たり前のように、ここで学校出て、大泉の町民と同じような職についている人が出てきたときに初めて「共生」という基盤ができるんじゃないかな。えらくなるとかそういう意味じゃなくて、今はほんとに労働するだけに来てるっていう感じだから。その中でも貸家がどうの、っていう交流はあるけども、本当に家族とか家庭とか一人一人じゃなくて、労働のために来てる感じだから。学校に行ってる人だって時間もないだろうしね。

一方、日本、および日本人のルール、マナー、慣習などを、ブラジル人が取り入れ、実践することで、初めて「共生」が実現すると考えている人も存在する。例えば、No. 403は、外国人が、日本のしきたりに従って、生活をするのが「共生」だと考えている。ただ、現実的には、宗教の違いなどの違いが存在しているため、例えばお葬式を地域で一緒に出すというようなことは難しく、本当の意味での「共生」は実現しないのではないかと述べている。No. 358も同様である。ブラジル人が、「日本語をしゃべって」、「日本のモラルや生活がわかって」、初めて共生が実現すると考えている。そして、その実現は、次世代になるであろうということが予想されている。

No. 403

だから、それはどちらがいいのかというのは判らないですけど、俺自身は、本来は同じ日本に住んでいれば、先ほども言ったように、同じように隣組に入って、同じように日本のしきたりでやってもらえるのが共生だと思って。ただそう言うとみんな問題が出てくるのは、文化と宗教の問題が一番出てきてしまうのですが、今言ったように、隣組でお葬式ができましたという時の問題なんかは、やはり全然宗教が違うとそれに同調できなくなってしまうというのが。同じ日本人でも学会の方と仏教の方の違いもあるのですから、外国人の場合は特にそうだと思います。だからそういう点がある程度割り切っていないと、共生というのは難しいのではないですかね。

No. 358

(大泉の「共生」について実現していると思うか?) どうなんですかね。実現っていう面では、保育園の中にも同級生の中にブラジル人の子がいて、うちの子どもなんか仲良く遊んでますけどね。小学校でもそうなんでしょうし、中学校でも当然そうでしょうし。ただ、うちの場合は保育園ですから、その上の状況はどういうもんかはわかりませんよね。

(その場合の「共生」の意味は同じ場所にいるっていう意味で?) というよりも、たぶんうちなんかの次の世代まで続くのであれば、そういった意味での共生になるっていうか、普通に一緒にいるっていう意味での共生が実現するんじゃないでしょうかね。普通に日本語しゃべって、日本のモラルや生活がわかって、みたいな。たぶんその上のお母さんお父さんの世代っていうのは、ブラジルで20年30年生活してきて日本に来たんでしょうから、それが急に日本に馴染めって言われても、逆の場合だったら私は馴染めないと思う。そういうことなんじゃないかな。(お子さんは)普通に遊んでますよ。

また、No. 73は、上記のような、ブラジル人が、一方的に、日本のルールやマナーを学び、適応するという状態でなく、時間的な経過とともに、日本・ブラジル双方の文化的差異がなくなり、融和した状態が「共生」だと考えている。いわゆる「メルティングポット」の状態であり、今後、時間的な経過とともにこうした方向に向かうのではないかと比較的楽観的に捉えている。

No. 73

「じゃ、あと町全体としてなんですけれども、共生というコトバ、ここではよく言われてますよね。大泉で、日系ブラジル人、外国人と日本人の方々の共生は実現していると思いますか？」

「うーん…、数はすくないけど、外国の女の人と結婚して一緒に住んでいるなんていうのもあるから、必ずしも共生はできないわけではない。で、お互いこう努力していけば、共生はできるんでないかと。」
「じゃ今は、『実現していない』と見られますか？」

「オレなんかは、共生の数はまあ全体から見れば少ないと思うけど、共生の芽っていうか、共生の方向に向かっているんでないかと思う。」

「これから増えていくんじゃないかな、と思いますか？共生できている人達。」

「ああ、増えていくと思うよ。まあうちちょっと日本が支援していかないと。」

「日本人側の態度だったり意識の問題だったり…」

「そう。…とオレは思うけどね。お互いそうしていけば、共生できる。数は多くなると。」

このように、一口に「共生」と言っても、大泉町の町民たちが考える「共生」には、さまざまなタイプのものが、存在しているということがわかる。

一つ目は、ブラジル人と日本人がそれぞれ干渉をせずに生活する「住み分け」の状態であり、こうした状態を「共生」だと捉えている人は、現状でも、「共生」が実現していると考えている。

二つ目は、日本人とブラジル人の中の「交流」が、「共生」が実現するための条件だと考えている場合である。ただ、ここで想定されている「交流」のあり方も、人によって異なっている。イベントなどにおける「交流」の機会を「共生」のための条件だと考える人がいる一方で、「共生」のためには、お互いのコミュニティに互いに影響を与え合うようなより深い「交流」が必要だと考える人も存在している。

そして、三つ目は、ブラジル人が、日本や日本人のルールやマナーを吸収し、適応する「同化」の状態、および、相互の社会的差異がなくなる「融和」の状態である。

このように、「共生」に対する共通認識が、住民の中で形成されていないため、外国人との関係、および町の将来に対する展望は、当然一致したものにはならず、そこには、今後、目指すべき方向性に関する、戸惑いも感じられる。

例えば、No. 318は、「日本人と同じルールで同じことをしていく」状態が、共生であると考えながらも、そうした状態を実現するための明確な展望は持っていない。町役場が主催する、国際交流をその糸口だとは考えているが、個人のレベルでは、「何からやっていったらいいのかわからない」と率直に語っている。

No. 318

「さっき言った『ともにいきる』ですか？何でもあの、違和感なく交流できるっていったらあれだけど、地域の行事、もちろん区費とかは払った上で、日本人と同じルールで同じことをしていくっていう。たぶん、向こうの人から見ればむずかしいことなのかもしれないんですけど、私たちから見ればなんでもないことかなって思うんですけど。だから、そういうのもあって、たぶん、向こうの方もそんなに進んで交流しようと思っていないと思うですよ。こんだけ人数がいるから仲間内だけでどうにかなっちゃうから。」

「そうですね。だから、仲間内だけじゃなくて。しょうがないんでしょうけど。町役場の国際生活課、というのか、けっこうね、ブラジルの方からはあれしたいこれしたいって、けっこう要望は出るらしいんですよ。田植えをしてみたいとか。だから、できるだけ実現するようにしているって。興味は持っているみたいなんです。田植えはしたっていうんですよ。こちら希望があれば、かなえたいというか、何が何でも一緒にしたくない、ということではないから。ただ、何からやっていったらいいのかわからないから。」

からないですよ。」

こうした状況を受けて、率直に、「共生」という言葉に対して苦言を呈す人も存在している。No. 162は、大泉町における外国人の問題が、共生という言葉に置き換えられていることに関して、危機感を感じている。

No. 162

「共生はね、僕の個人的な意見ですが、していないと感じます。今、外国人問題を共生という言葉で置き換えてるんですよ、僕はそういう風に思ってるんで。一昨日も友達に言ったんですけど、それ使うのやめようって。決して共生してないんだからさって。だから、美化をしないようにしないと…美化すると事故が起きると思う。」

ただ、一方で、大泉町は、さまざまな「共生」化施策を実際に行っており、そうした施策が、日本人、ブラジル人を問わず、少なくない住民にとって、役立っていることもまた事実である。大泉町の「共生」化施策として、代表的なものだけでも、在住外国人を交えた「地区別三者懇談会」の開催、各種国際交流活動・イベントの実施、ポルトガル語による情報提供などを挙げることができる。

にもかかわらず、「共生」についてのイメージがはっきりせず、住民の間で、その認識が一致していないのは、やはり、将来的に、日本人と外国人との関係をどのように構築し、どのような社会を創るかというビジョンが提示されていないということがその原因ではないかと思われる。現状の諸施策は、どれも必要なものではあるが、言い方を変えれば、必要に迫られた対症療法的な性格が強いものとも言える。そうではなく、将来目指すべき「共生」社会を提示し、また、現状はどういう段階にあって、そのためには、どのような施策が必要かということを明確に示すことが出来れば、これまで見たような「共生」に対する認識の違いもある程度解消し、町が実施する「共生」施策への理解がより深まるのではないだろうか。

先に述べたように、「共生」という言葉の理解には、大きく分けて以下の三つのものが存在していた。一つ目の理解は、外国人との間で住み分けが進んだ状態のことだというものであり、二つ目は、日本人への同化、ないし融和が進んだ状態だというもの、そして最後は、日本人と外国人とが、互いに交流をしながら生活をする状態だというものである。

ただ、これら三つの中で、今後大泉町が進むことのできる道は限られているように思われる。

第一の道については、現状において、住み分けがかなり進行し、目前の問題を回避することには成功しているとも言えるが、一方で、相互の交流・接触がない中での、不信感・恐怖感が増幅されており、問題が一時的に目立たなくなることはあっても、根本的な問題の解決には至らないだろう。また、日本人・ブラジル人双方のコミュニティ間の交流だけでなく、地域社会全般において交流が少なくなっており、やはりこうした問題は、住み分けによっては解決しないと言える。

第二の道についても、大泉町において、外国人登録者数が約6,500人存在し、外国人住民の比率も15%を超えるような現状では、達成することが難しいと言わざるを得ない。このような同化・融和は、外国人の数がまだ少なかった、移住初期、すなわち1990年代初頭の段階だからこそ、達成し

得たものだろう。当時のブラジル人に対して高い評価をする町民は、現在においても多いが、当時と現在とでは、在住するブラジル人の規模や置かれている状況が、大きく異なっていることを忘れてはならない。

こうして考えると、やはり、第三の道が、今後取るべき道として唯一残されたものだと言えるのではないだろうか。ありきたりではあるが、日本人とブラジル人が互いに交流を持ちながら、共に生活できる社会を模索しなければならない。

とはいえ、具体的に、どのような行動をとれば良いのかわからない、という声が多いのもまた事実である。現段階で明確な回答を提示するのは容易ではないが、「行政区活動」というものが一つのヒントにはなるのではないだろうか。

第1章、および第2章でも述べたように、大泉町は、工業都市であるという性格上、他の地域から移住してきた人の割合が高い。すなわち、多くの人が「よそ者」として、大泉に移ってきて、生活を始めているのである。その際、地域社会に溶け込むにあたって、大きな役割を果たしたのが「行政区活動」であったと、何人かの面接調査対象者は述べている。

外国人に対しても、同じことが言えるのではないだろうか。地域社会における深い交流が全くない現状において、その手がかりとなるのは、やはり行政区活動を初めとした地域の活動だと言えるだろう。また、日本人住民も、その多くが、外国人も行政区活動に参加すべきだと考えるようになっている。ただ、具体的な働きかけということになると、区長さんなどの個人的な努力に頼っているという面が見られるので、今後、こうした働きかけに対する、行政などによる制度的な支援が、これまで以上に重要になってくるのではないだろうか。

(濱田国佑)

表4-20 共生に関する意識

| NO | 年齢 性別 | 共生の 成立条件 | インタビュー回答 |
|-----|-----------|-------------|--|
| 14 | 60代 男性 | 交流 | (共生は)していないだろうね。仕事、ビジネスはやっているかもしれないけれど、プライベートは無理みたいよ。そこに公園があるんだけどね、そこなんかとられちゃうんじゃないの、外国の方に、ブラジルの方に、公園を(笑)。 |
| 24 | 60代 女性 | 交流 | してないですよ。それは町が言ってるだけ。町が結局その、そう言わないとき、やっぱりあれなんじゃない、はっきり言ってしてないですよ、してたらもうちょっといいようにいってますよ。 |
| 73 | 60代 男性 | 融和 | うーん…、数はすくないけど、外国の女の人と結婚して一緒に住んでいるなんていうのもあるから、必ずしも共生はできないわけではない。で、お互いこう努力していけば、共生はできるんじゃないかと。 |
| 127 | 30代 男性 | 交流 | 共生っていうのは、お互いに、ある程度影響しあって、成り立ってる感じじゃないですか…。(現在は)単独で二本立ち上がってるっていう感じで…。 |
| 148 | 60代 女性 | 住み 分け | 共生できているんじゃないかなと思いますけどね。段々ね。ええ。これ以上、そういう風に(犯罪とかが多く)ならなければ。 |
| 162 | 50代 男性 | 無回答 | 共生はね、僕の個人的な意見ですが、していないと感じます。今、外国人問題を共生という言葉で置き換えてるんですよ、僕はそういう風に思ってるんで。一昨日も友達に言ったんですけど、それ使うのやめようって。決して共生してないんだからさって。だから、美化をしないようにしないと…美化すると事故が起きると思う。 |
| 163 | 50代 女性 | 同化 | (大泉町は共生に成功していると思うか?) 外人にとっては大泉町っていうのは居心地のいい町になってると思うんですよ。そうでなかったら来ませんものね?だから、(外国人比率が)15%っていうのはすごいですよね。恐ろしいなと思います。だからちょっとでも事故したとかあったら追放するとかして、いい人だけ残すんであればいいとは思ってますけどね。(じゃあ共生がうまくいってるとは感じない?) そうですよ。 |
| 166 | 50代 女性 | 住み 分け | いやー、うまくは行ってないと思いますよ。ただ、お互い我慢してるからかな。文句言う人はすごいゆってますよ。(それは主に日本人?) 日本人が。要は目障りだとか。やっぱり、外国人村みたいのを一つ作ればいいのか。 |
| 318 | 30代 女性 | 同化 | さっき言った「ともにいきる」ですか?何でもあの、違和感なく交流できるっていったらあれだけど、地域の行事、もちろん区費とかは払った上で、日本人と同じルールで同じことをしていくっていう。 |
| 359 | 70代 男性 | 同化 融和 | 共生の町づくりというテーマで大泉はそれなりにやっていますけれど、ブラジル人が共生というのはどういうことか理解していないのではないかと。もう一つは共生だといって一緒にになると、ブラジル人は帰れなくなってしまうのではないかな。我々はここに定住するつもりはないよ、2~3年で帰るのだよという人は多い。だから、そういうものに共生といって一緒にやらなくてもいいのだよというものがあるのだと思う。 |
| 361 | 50代 男性 | 交流 | 私は実現していないと思っています。掛け声だけはあると思うんですけども、あの一、実際、まあ私がそういう場についてないっていうのがあるかもしれないんですけども、交流の、例えばボーリング大会とかやっているんですよ、実際。ですから、そういう町としてはやっているんですよ。ただ、そういうところではあるかもしれないですけど、やっぱり地域としてはないと思いますね。 |
| 402 | 70代 男性 | 経済的 貢献 | まあ、共生するっていうことは、きちんと納税するっていうことですよ。だから、納税する仕組みが出来て、相手さんも、安月給だけれども、日本の国に納税するっていうことが、出来あがらない限りは、見かけの共生だからね。 |
| 403 | 60代 男性 | 同化 | 俺自身は、本来は同じ日本に住んでいれば、先ほども言ったように、同じように隣組に入って、同じように日本のしきたりでやってもらえるのが共生だと思って。 |
| 404 | 60代 男性 | 住み 分け | まあ、一緒に問題なくいるんだから、共生してるんでしょうね。そういう意味ではね。これは、我慢できるか、私にはわかんないけれども。まあ、特に大きな問題がなく、ちいちゃい問題はたくさんあるんでしょうけれども、特になくやってるわけですから、やれ役場も、みんな、警察も、一所懸命協力してるんですよ。それがいいかどうかっていうのは、私にはわからない。 |
| 442 | 50代 女性 | 同化 融和 | どうなんですかね。実現っていう面では、保育園の中にも同級生の中にブラジル人の子がいて、うちの子どもなんか仲良く遊んでますけどね。小学校でもそうなんでしょうし、中学校でも当然そうでしょうし。(その場合の「共生」の意味は同じ場所にいるっていう意味で?)というよりも、たぶんうちなんかの次の世代まで続くのであれば、そういう意味での共生になるっていうか、普通に一緒にいるっていう意味での共生が実現するんじゃないでしょうかね。普通に日本語しゃべって、日本のモラルや生活がわかって、みたいな。 |